



羅針盤



猪又 直子

Naoko Inomata

昭和大学医学部皮膚科学講座 主任教授

今日から名探偵！

食物アレルギーといえば、一昔前は、子どもの病気と捉えられてきた。しかし、近年、先進諸国において小児のみならず成人においても、食物アレルギー患者の増加が指摘され、社会的にも問題視されるようになってきた。実際、日本の『食物アレルギー診療ガイドライン 2021』では、成人領域の内容も新たな章として取り上げられている。

成人領域の話題が学術的に取り上げられた当初、小児の特徴と異にする臨床型として、食物依存性運動誘発アナフィラキシーや口腔アレルギー症候群に注目が集まった。その後、2008年に英国のLack医師が二重抗原曝露仮説を唱え、食物アレルギーの病態における経皮感作の重要性が認識されるようになり、食物アレルギーは瞬く間に皮膚科医にとって身近な存在になった。

本領域は皮膚科医に大きなアドバンテージがある。第一に、皮膚科医は食物アレルギーの主要症状である皮膚症状を正確に捉えることができる。誘発された皮疹が膨疹なのか、それとも血管性浮腫なのか、あるいは湿疹病変であって本症を否定できるのかなどの判断は診断上きわめて重要である。第二に、皮膚科医は皮膚試験に精通している。成人では原因が多彩なため、市販の検査では

検査したい項目を到底網羅できない。そこで有用なのが皮膚試験である。疑われる食品を入手することができれば、基本的には何でも調べられる。この手法を活用できれば、未知のアレルギーを発見するチャンスも高まる。第三に、皮膚科医は感作部位としての皮膚を熟知している。経皮感作によって食物アレルギーが生じる例では、アトピー性皮膚炎が既往にあることが少なくない。そのため、食事指導とあわせて、感作部位である皮膚の状態を正常に管理することで、感作の増悪や予防に寄与することができる。

成人の食物アレルギーは先人の知恵と努力により、その全体像が少しずつ浮かび上がってきた。ただ、その多様性や複雑さを知り、全貌に迫れば迫るほど、むしろ尻込みしてしまう人もいるかもしれない。そこで、本特集では、エキスパートの先生方の叡智を結集し、そのすべてを伝授していただくこととした。読者の皆さんがこの本を読み終えたときには、診断推論力は磨かれ、診断力が向上していること間違いなし！そして、原因不明のアレルギーを自らの手で解決する名探偵になっているものと期待する。